

林政ジャーナル

No. 6

1992年2月15日

発行所

日本林政ジャーナリストの会

〒107 東京都港区赤坂1-9-13

日本林業協会内

電話 03-3587-1210

楽しかった尾瀬取材

会 長 増 田 俊 二

「わあっ、あそこを登っている」。「ほら、今、あの木の下だ」。「吉藤さんがもう、へばっているぞ」。

尾瀬沼山荘を、朝早く先発したグループが、はるか彼方、快晴の燧ヶ岳を登っていく。これを山登りはしないで、尾瀬沼畔の沼尻で一休みして、尾瀬ヶ原に向かう後発グループが見つくて、歓声をあげる。みんな童心に帰っての一コマである。

昨年共同取材は、十月二、三、四日の二泊三日、尾瀬で行われた。会の活動方針のテーマになっている「林業と自然環境の研究」を実地にやろうという、重要な仕事である。この時の天候は、初日は雨、残りの二日間は、ここでは珍しいという快晴に恵まれた。おかげで取材もうまくいったし、紅葉の素晴らしさも満喫できた。

年間五十万人が押しかける尾瀬。そのかなりの面積は、尾瀬林業の民有地である。親会社は東京電力で、この場合の林業は、水源林としての管理、保全が主目的となっている。一方、ハイカーのメッカ尾瀬の保持には、多量の木材が使われている。木道、橋、道標、山小屋、公衆トイレ……。これらの用材を、同社は全て域外調達する。これで林業と環境保全を、両立させている。そのかわり金にかかる。

今度の尾瀬行きで、会の一行十八人が、果して集団行動できるかどうかということが気がかりだった。参加メンバーは二十代から六十代まで、爺さんと孫ほどの年齢差のある集団である。三日間の道のりは、二十五キロもある。だが、結果は幸いに、一人の落伍者もなかったのである。これは、万一に備えて、疲労が重なる三日目に、尾瀬林業の須田支社長ら幹部が、若くて屈強なボッカ（小屋の荷物運搬人）を同行させてくれるなど、その気くばりのおかげだと深く感謝している。

》》》》 尾瀬、共同取材の記 《《《《

(平成三年十月二～四日)

当会の平成三年度の基本テーマは、「環境と森林」。そして共同取材で尾瀬に出かけることにした。尾瀬は日本で一番環境保全が厳重な場所である。ここでは湿原がいかに守られているかを取材した。

十月二～四日、二泊三日の旅になるが、増田会長、杉本前会長ら十八人が参加した。

二日午前八時四四分、東京駅発上越新幹線で上毛高原駅へ。この秋は随分雨や台風が多く、各地の林地に被害をもたらしたが、この日は快晴。神様も共同取材のまじめな意図をよしとされたのであろう。

実は尾瀬湿原には二人の地主がいる。一人は国で、世話人は林野庁。もう一人は東京電力で、世話人は東電の子会社「尾瀬林業」。今回の旅行はこの両者に協力していただいた。東電が地主とは以外と思われるだろうが、尾瀬は観光資源と見られる前は、水力発電の立地点だったのである。

だがせいぜい百万キロワットの発電所（大型火力、原子力発電の一基分）をつくるのに世界有数の湿原をつぶす手はなかろうという世論が高まり、東電も水力発電所建設を断念した。

伊勢湾台風で風倒木の被害が出たが、その後始末を終えて、尾瀬林業は昭和三十九年伐採、素材販売の一切をやめて、もっぱら環境保全と山小屋経営に専念している。

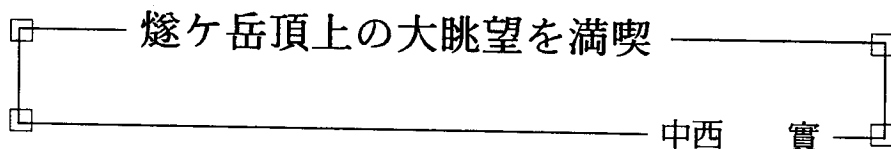
尾瀬を現状のまま保全するのがいかにむずかしいか。いま年間五十万人の入山者がいるが、ツカと湿原に入り、ゴミをまき散らし、生活排水とし尿をたれ流すと、湿原は富栄養状態となって生態を変える。

自動車を入れない。荷物は背負子が、重量物はヘリコプター。混雑時の週末は入浴禁止等々の手



鳩待山荘にて

を打っている。歩くのは一メートル二万五千円かかる板の道だ。東電小屋は五千万円かけてし尿と雑排水の合併処理浄化槽をつくった等々自然を現状維持するのに、いかに金がかかるかを実感した旅だった。それにしても尾瀬の秋色はすばらしかった。



尾瀬、と聞いて一も二もなく共同取材参加を申し込んだのだった。

九一年十月二日、増田会長以下一行十八人は、上毛高原駅で下車、迎えるバスに乗り込んだ。途中、吹割の滝見学。水量の豊かさに驚く。大清水で昼食後、いよいよ林道終点から三平峠越え、尾瀬沼を目指した。

初日は尾瀬沼ビジターセンターを訪ねたり、沼周辺を散策したあと、尾瀬沼山荘泊り。夜は山荘で山口営林署の方との懇談。昭和三十九年以降一切伐採なし。三十年代年間一万人程度だったハイカーの入山が、今日では五十万人とか。し尿雑排水処理に頭を痛めているとも。木道保守管理に年間一億円も使っている。頭の下がる話であった。

翌三日は五時起床。前夜の満天の星に続いて雲一つない快晴だ。燧ヶ岳が目前にある。かねてのしめし合わせ通り、燧登山を決行する。参加者は計九人であった。

尾瀬沼南側を歩き、沼尻から直登する。一息入れたころ、オコジョがちょろちょろ岩かげからのぞく。可愛い。さすがは尾瀬だ。

燧ヶ岳祖嶺（まないたぐら 2,346メートル）頂上に立ったのは十一時すぎ。続いて第二のピーク柴安嶺（2,356メートル）登頂が三十分後。ここでおにぎりとおでたまごの昼食。

三六〇度の大眺望だ。西の方、尾瀬ヶ原つきところに至仏の大山塊あり。東の方、尾瀬沼は箱庭のよう。日光の男体山も望見された。この天下の美観を我が物にできる幸せは、登山者の一大特権であろう。年に数回しかない快晴に恵まれた幸運に、ただただ感謝するのみであった。

あとで聞けば、若き山口営林署長らは事故がないよう気くばりのしどおし。天候の急変にも備えていたという。しかし、昔とった何とやら、杉本前会長ら中年パワーは健在だった。五年前に新装の小屋に無事到着。ホテルと見違えるばかりの小屋で疲れた私たちを待っていたのは、秋の夜の楽しき語り、パーティであった。（共同通信）

毎月第二月曜日は幹事懇談会

— 幹事の出席をお願いします —

昨年の総会で、会の活動を活発化させるため、毎月第二月曜日を幹事懇談会開催日と決め、午後六時から林政記者クラブを借りて、打ち合わせを行ってます。皆さん方多忙なこともあって、出席率はあまりよくありません。

定例会ですので、逐一ご案内は差し上げておりませんが、研究会のテーマ設定、講師の選定など、会の活性化に欠かせない会合ですので、幹事の皆さん方のご出席をお願いします。

訃 報

高田通夫 氏

読売新聞社論説副委員長、当会幹事。2月1日午後8時16分、心不全のため、東京都港区の病院で死去、54歳。葬儀・告別式は4日正午から港区虎ノ門3-11-7栄立院で執り行われた。喪主は妻紀子さん。ご冥福を祈ります。